

2009年1月24日勉強会議事録

ボードリアル『消費社会の神話と構造』第三部Ⅰ後半からⅡ前半まで

発表者 厚地、市川

参加者 嶋田、岩瀬、市川、厚地、古川、十河、嶋田紫、久富

記録者：久富

### 第三部Ⅰ

#### 【ポップ、消費の芸術？】

○芸術とは・・・本来“消費”から程遠いもの。ポップは芸術を“消費”させるもの。

┌ 芸術＝超越性    ex)シュールレアリスム＝非日常性・違和感に隠されたもの  
└ ポップ＝日常性

・ゴッホの「ひまわり」という絵は、単にひまわりを描いただけでなく、そのひまわりによってゴッホの内面性が表されている。ポップアートに代表されるマリリンモンローのプリントはただマリリンモンローという記号を示しているに過ぎない。

○“署名” (p165/l.1) もまた記号と言える

⇒“ピカソ”という署名があるだけで売れる。それがあって信頼・称賛されるモノ？

○モノには二面性があるのではないか。

・同じモノに対しても、ゴッホという名に感動する人とゴッホの描いた絵の内容に感動する人がいる。

キュビズムという手法・・・絵画の中の固有の法則に従って展開する

⇒絵画のみの世界で存在する

ポップアート・・・わかりやすさのみを追求し、ただ広める意図を持ったものでは。

・ここで“消費”について考えたほうがいいのかという意見が出た。

○受け手と作り手

受け手によったらポップアートも芸術になるのではという疑問が出た。

・芸術（ベートーベン・ゴッホ）も受け手にとっては消費されていると言える。着メロも同列。ただ聞きたいがために流すのではなく、こんな音楽を自分は好んでいるという主張（意図）を他に示している。その点で、ベートーベンであっても着メロとして選択された時点で消費の対象となる可能性を持つ。

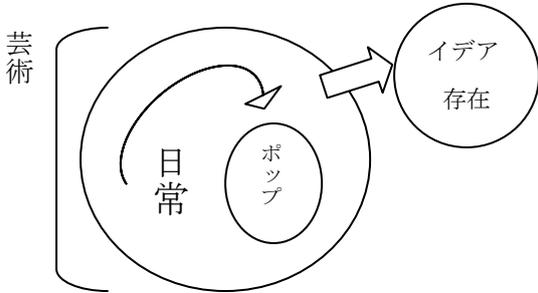
・ポップ・・・芸術性を消費する＝日常的なものにする。

ex)三面記事・・・物事を事実として受け止めるのではなく、記事にすることでその事件の酷性までも“消費”する

・ポップは日常のものを切り取るが、それをいくら続けても日常性になるわけではない。

**芸術**・・・日常性を描いてはいるが、その外にアイデアをも表す

**ポップ**・・・日常のものを描くことであくまでも日常を示す



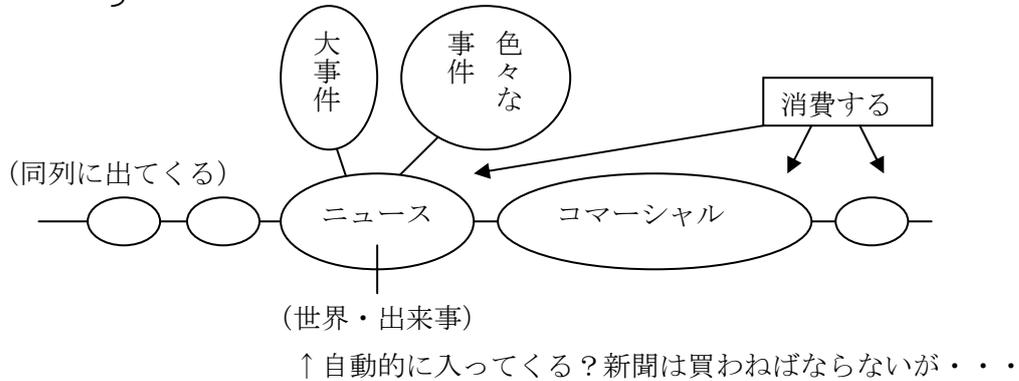
ex)フィギュア (ポップアートの代表?)  
エヴァンゲリオンのキャラクターをいかにアニメのまま忠実に現実に再現するかのみが目的。そこにアイデアはない。

・ポップアートは日常性を切り取る。1回目はその斬新さが有効だろう。では2回目3回目はどうなるのか?現在のポップアートはどうなっているのかという疑問が出た。

⇒ポップアートはやったもん勝ち。いかに新しいものを見つけられるかということのみ  
⇒⇒完全に時代の流行にのみ込まれている。現代芸術の行き詰まりが垣間見える。

**【メッセージの編成】**

可能性 }  
確信 } を消費する (p175/L.3) とは・・・



**【メディアはメッセージである】～【疑似イベントとネオ・リアリティ】**

○疑似出来事とは?

- ・一人の人間が殺され、それがニュースや記事にされるとき、“殺人事件”というカテゴリで分類し、記号として受け取るために、“疑似”ということになるのではないか。
- ・現実はそのそんなに簡単に切り取れるものではない。それが何の矛盾もなく、わかりやすく示されている⇒メディアによってすでに事件が噛み砕かれており、視聴者はただそれを消費するばかりであることが疑似ということでは。

⇒メディアに消費社会の構造を変えることは不可能。

変えるどころか、メディアが率先して消費者会を担っている。

○広告の評価が記号になる

・シャンプーの例え・・・ “しなやかな質感” “なめらかな手触り” は、視聴者がそう思い込み、使用することによって達成される。そもそも何の情報もなしに区別できるものではない。⇒CMによって作られた感覚

・コーヒーの例え・・・ “大人の味” “上質の香り” など、実際の飲料の味というよりはむしろコーヒーを飲んでいるという雰囲気を味わう。⇒CMによって与えられるイメージ

・他にも、インターネットのロコミサイト、CDジャケットのライナーノーツの例が挙げられた。

## II 消費のもっとも美しい対象——肉体

### 【あなたの肉体の秘密の鍵】

○エル誌の記事・・・自分の肉体をケアせよという脅迫じみた内容

ここで、現代では、肉体が神の位置に取って代わったのではないかという意見が出た。

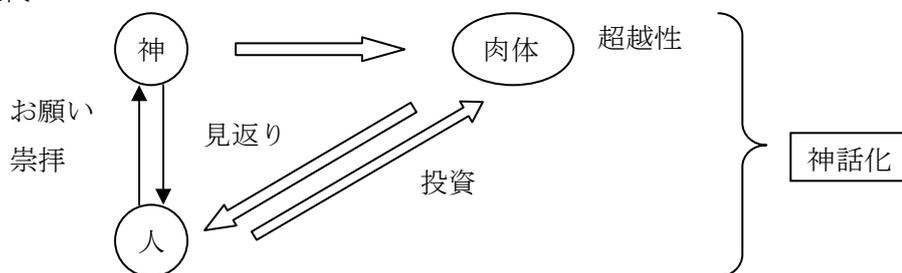
○肉体への物神崇拜

<昔>

霊魂 > 肉体

肉体を傷つけることで、肉体を開放し、精神世界へと近づこうとした

<現代>



<神話化>・・・肉体に投資すれば見返りを得る。肉体は自分のものだが、意のままにならない（例えば痩せたい、背が高くなりたいと望んでなれるものではない）という点で、超越的なもの、絶対的（新聖）なものに見なせるのでは。よって、神と人との関係と同一視できるのではないか。

○肉体に投資する・・・他者との差異化（比較）を図るため。  
自分だけで完結するものではない。

### 【機能的美しさ】【機能的エロティシズム】

○“機能的”とは・・・

・小顔がいいとは・・・8頭身に見えることではないか。そもそも8頭身が良いというのはパリコレのモデルの影響では。

・最近、ミスユニバースで健康的な（細すぎない）モデルが上位に入ったという。

⇒新たな基準（価値観）を作ろうという動きではないかという意見が出た。

（記号）

結局は、物神崇拜主義が健康崇拜主義に変わるだけだろう・・・

・ファッション業界を見てもわかるように・・・

みんなが“良い”と思ったものが流行するのではなく、まず、“これがいい”という基準が上から与えられて、それをみんなが次第に“良い”と置いていく（思い込まされていく）

⇒個人の価値観ではなく、社会的ステータスにみんなが群がるもの＝“機能的”なのではないか。

### 【快感原則と生産力】

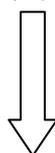
○“解体された肉体と分断された性欲のレベルで収益を上げる”（p197 傍点部）とは？

おそらく、“解体された”とは、どんどん自分の肉体に熱中する度合・箇所が細分化していくということでは。ex)シャンプーとボディシャンプーの区別

・解体された肉体＝機能的美しさ、分断された性欲＝機能的エロティシズムを指すのではないか。

### 【肉体の現代的戦略】

◎昔は、肉体を痛めつけることで魂の開放を目指した（⇔快楽主義）



快楽主義と禁欲主義の2つの矛盾がある

◎現代は、体が健康であることを目指しながら（⇔禁欲主義）、実際は体にとって厳しい状態（ダイエットなど）を強いている（⇔快楽主義）

⇒これこそが「現代の神話」ではないか・・・神が肉体に据え変えられている